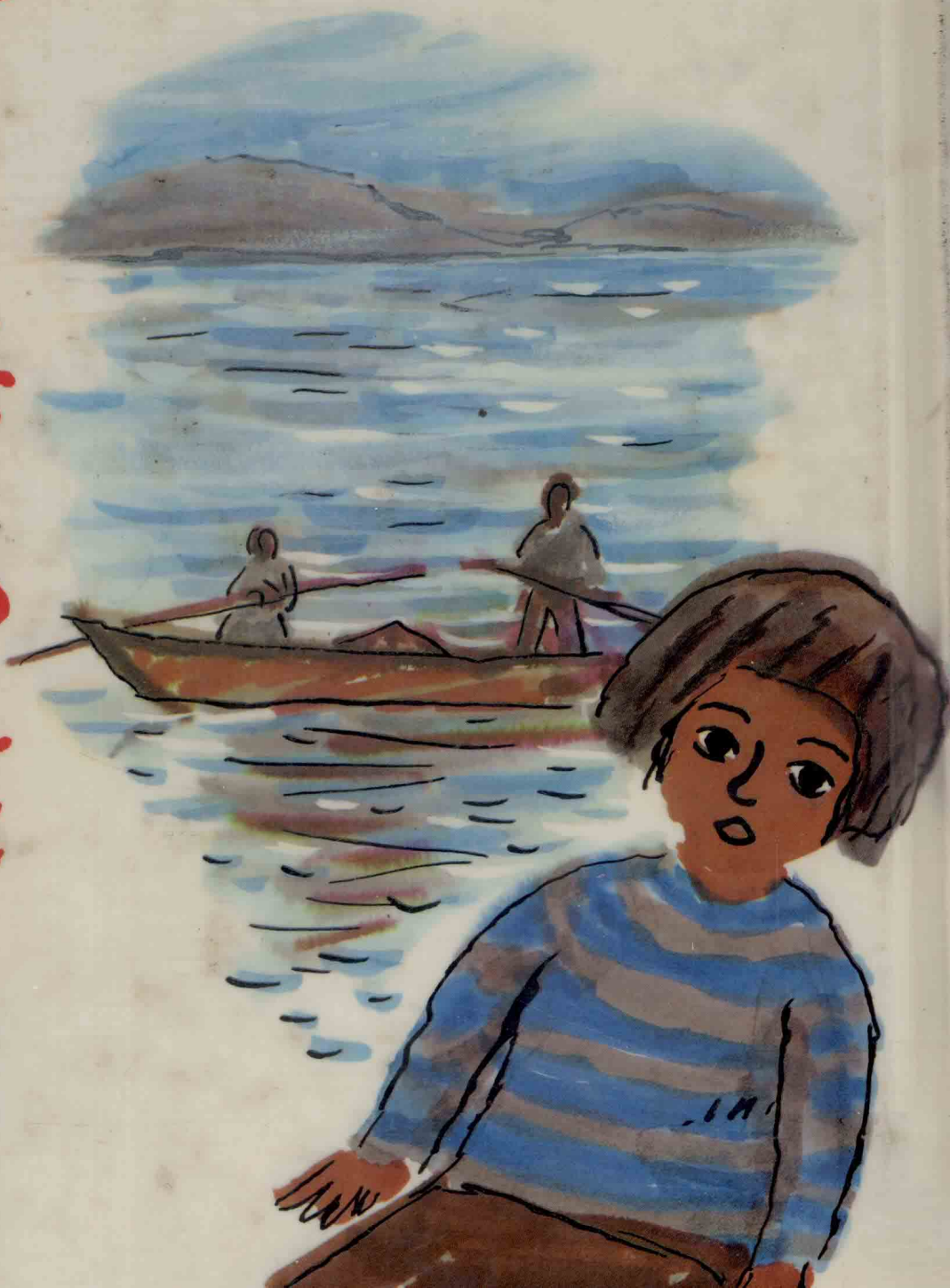


十三の海をかえして

吉村証子・作
津田櫓冬・絵



岩崎幼年文庫16

ナミの海をかえして

吉村証子 作

岩崎書店 1980

92P 22cm/NDC 913

岩崎幼年文庫16

ナミの海をかえして

1980年4月30日 初版発行

著 者／吉村証子

画 家／津田櫓冬

発行者／森山甲雄

発行所／岩崎書店

東京都文京区水道1の9の2 〒112

電話 03・812・9131

振替 東京 7-96822

活版印刷／株式会社 KMS

平版印刷／三美印刷株式会社

製本／小高製本工業株式会社

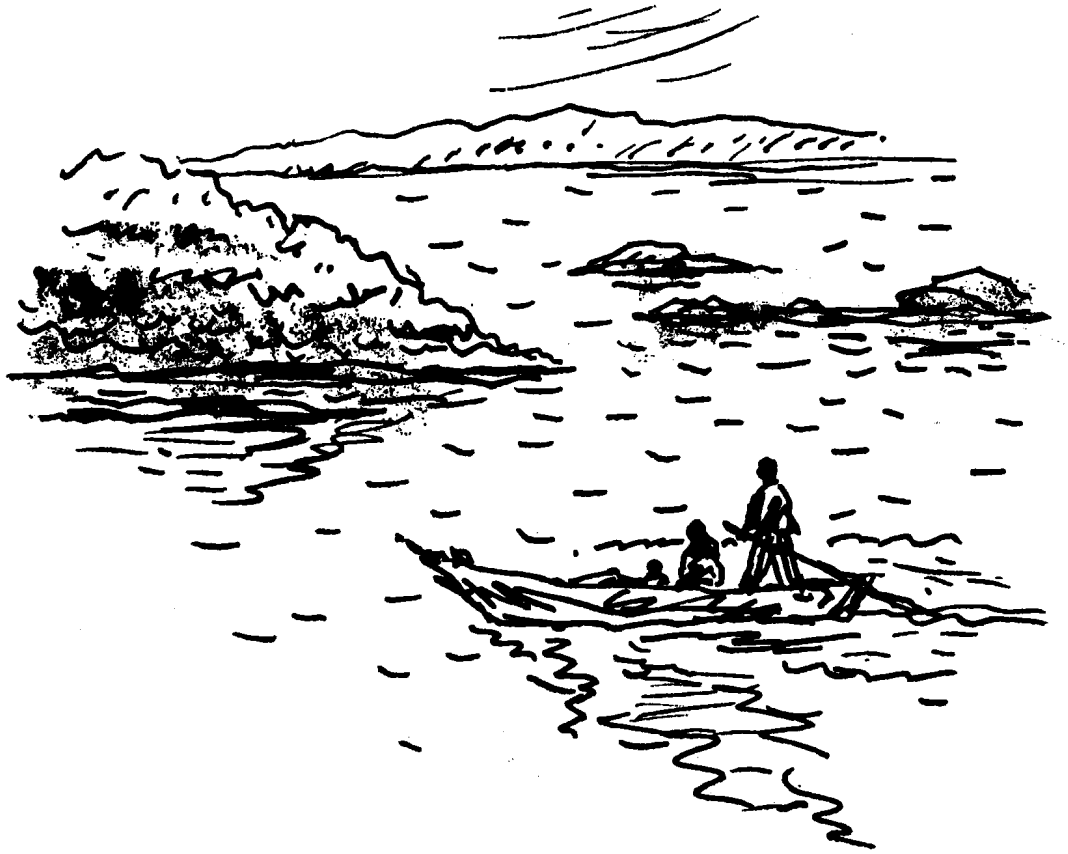
©1980 Akashiko Yoshimura/Rotō Tsuda

(分)8393(製)491680(出)0360

岩崎幼年文庫 16

ナミの海をかえして

吉村証子・作 津田櫓冬・絵



もくじ

ナミの海^{うみ}をかえして 5

證子^{あかしこ} ちっちゃん アカイモ

お天気^{てんき}会社^{がいしや}の話^{はなし} 43

あとがき(代田昇) 88





ナミの海をかえして



まこちゃん。

おたんじょう日のプレゼントに、なにをあげようかなあって、おかあさん、このあいだから、まよっていました。

お人形にんぎょうのようふくが いいかなあ。

十二色しよくの、色えんぴつが いいかなあ。

じてんしゃにしようかなあって。

でも、一つ大おおきくなるまこちゃんに、もっと大だいじ事なものを、あげたくなりました。

いつか、まこちゃんがわかるようになったら、ぜひ聞きいてほしいとおもっていた、ひとりの女おんなの子このおはなしなの。

その女おんなの子この名な前は、ナミといいました。青あおい海うみにかがやく波なみからとった、ナミでした。

ナミのうちは、漁師りようしでした。

小ちいさな船ふねを、一いっそうもっていました。

おとうさんが、大おおきなろをこぎ、おかあさんが長ながいさおをつかって沖おきにでて、魚さかなをとりました。

一ひと晩ばんじゅう魚さかなをとることもありました。おなかですくと、おかあさんは、ごはんをたきました。おとうさんは、とりたての魚さかなで、さしみをつくりました。

日ひの出でをながめながら、たきたてのごはんを、ふうふうふいて、どんぶりに山やまもりの、おさしみといっしょにたべました。

おとうさんとおかあさんは、ナミが生うまれたとき、おいわいに新あたしい船ふねを買かいました。

漁りようがやすみで、しばらく船ふねをつかわない季き節せつには、きれいに

あらって、岩かげにあげました。船のまわりをしっかりかこつて、雨にもぬれないようにしました。海に浮かべておくと、船のそこに、カキなどの貝や、海そうがくつついて、船をいためてしまいます。

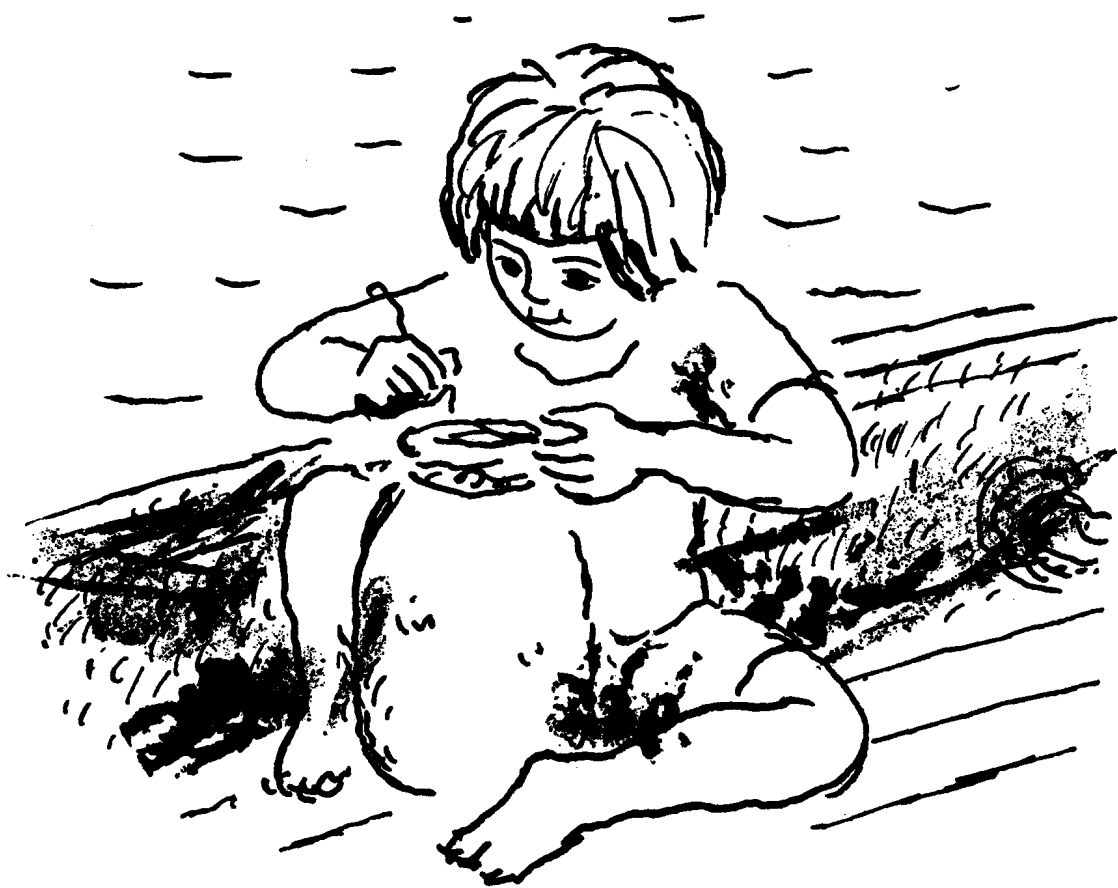
はたらきもののふたりは、船もあみも、つりの道具も、大事にしていました。

ナミは、はじめ、おかあさんにおんぶされて船にのりました。そのうち船の中をはいまわり、魚をとる道具であそびました。やがて、歩けるようになると、おとうさんやおかあさんといっしよに、ナミもあみをひきました。

タコつぼで、タコをとることもありました。ナミが船にあげられたつぼをのぞくと、タコは、足をふんばっていました。

「でておいで」

ナミがつぼをたたいても、出てきません。



おとうさんが手ぎわよく、タコをだしてくれました。タコは、つばから出るなり、八本の足で、走りまわりました。

ナミは、きゃっきゃつといって、おいかけました。でもナミは、イカには、手をだしません。ついこの間、すみをかけられたからです。

五さいになると、ナミは、もうおよぎがじょうずにできました。

ナミは、浜べでは、貝や海そうをひろって、ままごとをしました。ひろったものを、手かごにいれてもってかえると、おかあさんが、おつゆのみにしてくれました。

ナミは、六さいになりました。

いよいよ小学生です。

ランドセルを買ってもらったときは、大よろこびでした。からのまませおい、ちかくの友だちやおばさんたちに、びょん



ぴよんはねて、見せにきました。

ところが、カゼでねたこともない元気なナミが、もうすぐ入学式というときに、ふしぎな病氣になりました。

おはしや、ちゃわんを、ぼろっとおとすことが多くなりました。石もない砂浜で、ころぶこともありました。

「ナミは、よっぱらったのかな」

はじめ、おとうさんは、じょうだんをいって、わらっていました。

しかしナミは、それから、よくころびました。

「ナミは、どこか、ぐあいがわるいのじゃないかしら？」

おかあさんは、心配しました。

ある日、急にナミのようですが、おかしくなりました。

からだがふるえだし、手や足を、うまく動かせなくなりました。

やがて、ゆびが、まがってきました。だんだん目が見えなくなり、口がきけなくなり、耳も聞こえなくなりました。

とうとう、動けなくなっていました。

そのころ、この村では、ネコがつぎつぎに死にました。おどろくろって、海にとびこんだり、はなを地めにすりつけて、さかだちをしたりしました。ネコの子も、そだちませんでした。

ネコとおなじような病気になる人がでてきました。ナミも、このおそろしい病気になってしまったのです。

「いったい、どうしたのだろう」

はじめ、村の人たちは、くびをひねるばかりでした。やがて

人^{ひと}びとは、気^きづきはじめたのです。

「ネコも人間^{にんげん}も、魚^{さかな}をたべる」

「魚^{さかな}が、あやしい」

「魚^{さかな}に、どくがあるのかもしれないぞ」

「海^{うみ}がきたなくなったからな」

「工場^{こうじょう}からながす、きたない水^{みず}のせいだ」

村^{むら}の人^{ひと}びとは、あちこちで、はなしあうようになりました。

村^{むら}のちかくには、むかしから大^{おお}きな工場^{こうじょう}がありました。長^{なが}い
こと肥料^{ひりょう}をつくっていました。今^{いま}では、ビニールの原料^{げんりょう}もつく
つています。

ビニールのふくろ

ビニールの人形^{にんぎょう}

ビニールのふろしき

ビニールのボール

ビニールでつくるものは、ふえるばかりでした。ビニールの原料は、いくらでも売れました。工場は、どんどん大きくなりました。工場は、やすみなくはたらきつづけました。

工場では、いらなくなったよごれた水を海にすてました。よごれた水の出口にちかい海は、にぎって、いやなおいかし、あぶらが浮いています。

やがて海には、魚が白いはらを見せて、おかしなおよぎかたをするようになりました。

魚をたくさんたべる水鳥が、目をあけたまま死んで、水に浮かんでいることもありました。

水鳥の死がい、一日一日とふえていきました。

「げんいんは、工場だ!!」

「工場は、ひどい。海をよごすな!!」